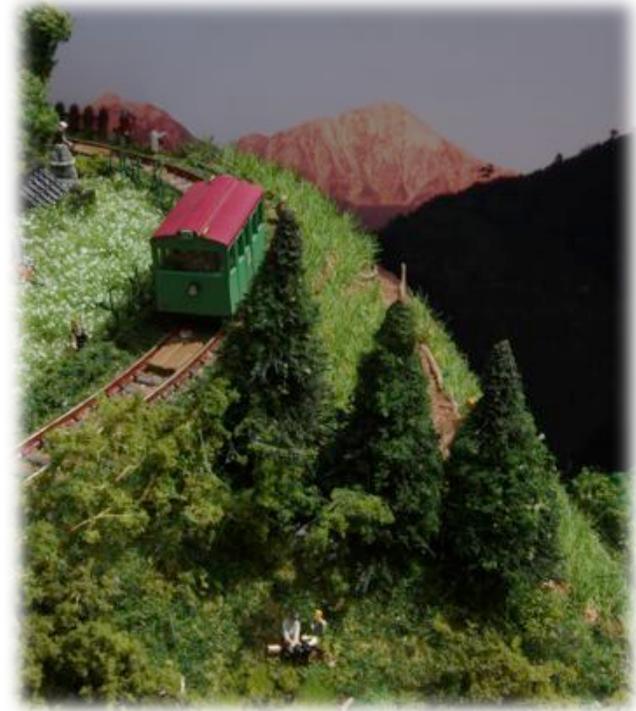


源吾鉄道



題字・虹写真 野牧源吾

製作 野中健一・柳原 望

協力 遠山下栗・野牧源吾

遠山和田・星野屋

尾張一宮・天吉

東池袋・キッチン風

西村春菜

2013年5月

くシナの木と蜂蜜とひね狐く



上栗の柄

上栗はいいとこ飯うまい
芋も野菜もうまい
猪は転げ落ちてゆく
人間はふんばれる

うまいものくすりなし
年寄りは早起きだ
神さまの景色見て
茶を飲んで深呼吸

上栗はいいとこきれいだよ
お日さまはご近所さ
山の端が空を切り取って
雲海は足の下

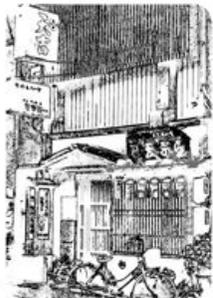
夕日の朝日岳
雪山もきれいだよ
雨風やり過ごし
谷架かる虹を見る

上栗はいいとこすべてある
なけりゃ作ればいいさ
水を引き味噌漬けそばを曳く
明日は何を作ろう

どこに行かなくても
ここにすべてがある
ここは天国さ
世界中見渡せる

未完成の味
江戸前天ぷら

天吉



一宮市栄 1-10-11 電 05868521 (72)

減農薬、無添加の食材をつかい、
バランスよく、カラダとココロに優しい
お母さんの愛情たっぷりのおうちごはん

キッチン ふう

豊島区南池袋4-16-3
都電荒川線東池袋四丁目/東京メトロ有楽町線東池袋5番出口すぐ
<http://foodpia.geocities.jp/kitchenfuu/>

「源吾鉄道～シナの木と蜂蜜とひね狐～」 誕生まで

制作記

長野県遠山郷下栗の里。「天空の里」と呼ばれるこの地に通うようになって、かれこれ25年以上になります。山道を上ると紅葉の山の奥に南アルプスを望む絶景が目の前に広がりました。車を降りると、足元に畑が広がり、見上げれば山の斜面に畑とへばりつくような家々をみてびっくりしました。ここにどうして、どのようにして住んできたのだろうと地理学の調査を始めていきました。そして知り合いになった野牧源吾・あゑ子ご夫妻宅に泊めてもらってはこの地に通い続けてきました。

山腹斜面の村に平らなところは道幅と家の幅しかありません。畑は斜面にあるもの、急なほど冬の日当たりが良く収穫も多く、40度を超える急斜面で麦や雑穀が栽培されていました。そして山栗や栃の実が採集され、獣が狩られて食料にされていました。隔離された自給自足の村のイメージがありますが、外部からさまざまなものがもたらされ、生き生きと繰り広げられる山の暮らしに魅了されてきました。

ここに鉄道が走っていたら・・・新しい家の建て方を考案し、新しい作物品種を持ち込み、農耕や生活の工夫を重ねてきた源吾さんならどうしただろう？・・・そんな夢から本作を思い立ちました。

村に生まれ90歳を超え、奥様に先立たれた今も元気で農耕をしながら暮らし続けてきた源吾さんからは、村の様子だけでなく生き方もたくさん学ばせてもらっています。いっしょに訪問するようになった柳原もすっかり魅了されています。お世話になってきた源吾さんを主人公とし、その生き様を鉄道に投影したらどうなるのだろうか？そんな想像から、ここに鉄道を敷き今に生かしてきた源吾さんを主人公とした一代記の映画という設定で、単館上映系の映画パンフレット仕立てにしました。そして、本作の構想中に「海に向かって」「笠木透」「生活の柄」（高田渡）という、曲は同じアメリカの古いフォークソングでも別々の歌詞で歌い継がれてきた歌も話題となり、これらの歌に込められた思いが下栗や源吾さんとも重なってモチーフとなりました。こうして本作のストーリーができました。

レイアウトの中にライフ・ヒストリーのエピソードを盛り込むさまざまな情景を盛り込み、そのエピソードを線路がつないでストーリーが展開するように走る路線を構想しました。しかし、悠久の村の暮らしに比べて、住宅事情からも作り込める時間労力からもレイアウトは小さなものに限られます。小作は60cm×30cmです。小規模で山の鉄道となれば森林鉄道が思い浮かびます。下栗のふもとの遠山谷には、かつて遠山森林鉄道が走っていました。このサイズにHOナローではエピソードを構成するだけの情景を盛り込めず、Nナローでは勾配を安定して走行させるだけの技術力・工作力を持ち合わせていないので、大井川鉄道井川線のような軽便鉄道規格の路線を想定しNゲージとしました。

今回は正面からだけ観るレイアウトを作ろうと柳原が提案しました。800～1000mの東南斜面に広がる下栗の景観はまさにそのものです。坂の畑と上下に点在する家々をつなぐつづら折りの道がその特色ですが、本作でそれを表現しようとする線路と絶壁だけになってしまいそうです。路線は半周回ってスイッチバックで少し登るシンプルなプランとして、下村駅からトンネルに入り上り勾配でトンネルを抜けて山腹を半周上って、スイッチバックで村の最上の上栗駅に至る線路配置としました。源吾さん考案の横長の家屋は残念ながら1軒のみになってしまいました。

レイアウトは2012～13年の年末年始と休みを利用して一気に製作し、ゴールデンウィーク中に一通り仕上げました。情景は夏過ぎの集落一帯とし、お盆過ぎに蒔いた蕎麦の花盛り、アワやヒエ、タカキビなど雑穀はこれから出穂するところです。そして芋や豆畑が育っています。畑仕事をする村人たちとそれを手伝う人たち、観光客が訪問し、南アルプスへの登山客もいます。山の地形はスタイロフォームを積み上げ、プラスタークロスや軽量紙粘土等で表面を作りました。正面の崖部分は小石を積み上げました。また下村駅裏の斜面には小石で石垣を造り、ウナギの寝床ほどの茶畑を確保しました。植物は、素材やキットを用いて製作したもの、完成品樹木の加工に自作もまじえて植えていきました。テーマとなるシナの木を入手して話がふくらみました。樹木はもとより雑穀類や作物はもつリアリティを追求したかったのですが、技術がかなわず、雰囲気だけなのが残念なところでした。建物はキット加工と自作です。山神様、神社に奉納された石、小さな河原の石・木、丸太は、遠山・下栗に出かけた折に現地で調達したものです。また、神社の注連縄は、ラオスに出かけたとき村の儀礼でいただいた木綿糸を燃って使っています。生成りのままですが、御利益をかけています。各所に貼られたポスター類は現地で撮影したものをアレンジしています。こうした実際のエピソードにちなむものがレイアウトに組み込まれることで、その思い入れもいっそう強まります。また村やお世話になった人々を思い起こします。

小さなレイアウトですが、その小さな一コマ一コマをストーリーで意味づけてつないでいくと、これまで聞いてきた話、見てきた光景、目に焼き付いてきた景色が想起されます。

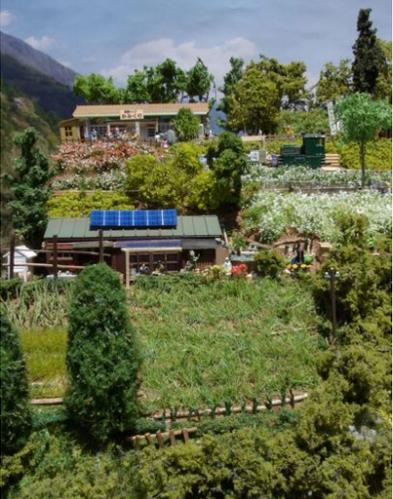
今後さらにこの村の暮らしぶりを再現し、村の活性化に努めていきたいと思っています。





「こらじや坂畑つきしで、米は作れんかった。畑でイモとアワにヒエにキビ、冬場はムギを作ってきた。それが主食だった。米を食べるようになったのは戦時中の食糧配給からだ。山の方では焼き畑もやっておった。オレン家もから焼き畑を分けてもらったとこだ。いいところは本家の兄貴がとって分けてくれよせんかった。そんでも、日当たりがいいで、冬の麦にはいいんだ。雪が積もらんでしとなるんだ。」

今は米も買って食べるようになったし、年寄りばっかになってまって仕事もきつなって止める人も多くなつとったんだが、オレンとこの野菜を店で食べた都会の人が米の食べれんアトピーの子どもたちに食べさせたいって、雑穀を分けておくれんかと頼みにきてな。したらもつと欲しいちゆうことになって、村の衆も何とかしたるまいかと作るようになったんだ。町の若い衆が手伝いに来てくれるようにもなつたんだ。こらは農薬もそう使わせんし、害虫駆除もお札でやつとるくらいだ。もつともありや迷信だろうが祭りでもみんな集まるのがいいんだな。



おおぜいが集まりや楽しいでな。オレは酒が弱くなつてしまつたが、昔は若いもんが「降参」というまで飲んでな。こんな時はオレのダボラもきいとくれるんで、つい酒も進んでしまふし、よけいダボラもでてくるんだ。そうしたら歌の好きなもんがおつて、オレのダボラで上栗の歌を作つたつて歌つてくれてな。元は「海に向かつて」やら「生活の柄」だとかいう題でアメリカの古い曲のフオークソングだそうだ。いろんなところでいろんな人に歌われてきたんだな。これもどうにもならんようなオレにあつとる歌だと思つた。」

オレはここにずっと生きてきて、ここから出とらせん。まあ運命だと思つとる。それでも家から山に向かつて眺める景色がいいんだ。山は海につながつておる。ひとりつきしでないんだ。雲の形はいつも違うし、空気も違う。新緑も紅葉も毎年違う。毎日の一時として同じことはない。やることは毎年おんなじでもやり方は一つとして同じことはありやせん。それでも、ここで百姓やつとるのがいいちばん性に合つとる。キドーもいろんなことに手間かけて世話せやならん。百姓の仕事と同じだ。手をかければかけただけ、いいもんになる。」

オレは九十歳を越すことができた、腰も弱つちやあきたし、物忘れも多なつてきた。そんでも、自分の体で覚えたことはようわかつとる。体が弱つた分、キドーを使いいいようにもできる。毎日が楽しいうてしかたない。これからどこまでやれるか、やつたらまいかと思つとる。」



上栗の柄

Introduction

源吾鉄道 〈シナの木と蜂蜜とひね狐〉

信州遠山郷上栗は、長野県と静岡県との県境に接し、南アルプスを目の前にする標高千mを超える小さな集落である。ここは、中央構造線帯に位置し、急峻な山と深い谷の山腹に集落があり、日本のチロルとも呼ばれる風光明媚な地であり、「天国にいちばん近い村」の別名もある。

言い伝えによれば、上栗は、静岡県大井川源流域の猟師が南アルプスを越えてこの地に住み着いて次第に開かれてきたとされている。急峻な南斜面に家がへばりつくように建ち、その周辺の常畑と山の焼き畑で雑穀類やイモを栽培してきた。狩猟と日本蜜蜂飼育も盛んなところである。一年中日当たりが良く、日の出は早く、日の入りは遅い。だが、「上栗行く時や嫁泣かせ 朝日早出て暮れ遅い」と暮らしぶりはは都々逸にもうたわれてきた。

この村も近年は限界集落といわれて久しいが、年寄りたちの元気な姿とともに自然な暮らしにあこがれて訪れる人々も増えている。訪問客を村に乘せてくる上栗と下村を結ぶ上栗鉄道は、今日では珍しくどことも接続しないで運行されている小さな路線である。鉄道といつても実際は簡易な軌道なのだが、村人はその創設者の名をとつて親しみの念を込めて「源吾鉄道」と呼んでいる。

この物語は、上栗の地に住み続け鉄道を敷設し走らせてきた男、遠山源吾のライフ・ヒストリーである。

源吾 鉄道

源遠山
源吾上栗
鉄道

「オレは、村の小学校を卒業して豊橋に奉公に出たんだ。初めて刺身を食べたし、市電にも乗って仕事に通った。電車はずっと乗れて便利なもんだと思った。」

奉公がすんだら、そのまま満州に兵隊で連れてかれた。列車に乗せられて大陸の景色をみちゃおった。そうしとるうちに終戦になって命拾いして、飯盒一つ持って上栗へ戻ってきたわけだ。養子に出されそうになったんで、オレはここで百姓やってやると山を分けてもらってここに住んだんだ。でも、誰も住まるところだったで、家を建てるのも畑を開くのもたいへんだったんだ。狭い上に急な斜面なもんだで、家の幅もとれやせん。古い家は奥の間には日がはいらんかった。そこで、部屋を横に並べた形に作ったんだ。廊下は縁側にもなる。」

「それで、どういうわけだったか今じゃ覚えとらんが食糧事務所に勤めることになったんだ。毎日、弁当こしらえて尾根道を走るようにして下村まで降りて、バスに乗って平岡まで出て飯田線に乗って通った。こりゃたいへんだった。そのうち自転車を手に入れてキド一道を使うようになった。キド一は戦争にいつとる間に鉄の供出で線路を敷くどころでなくなって、男衆も戦争に出ていっておらんようになって、路盤しか残とらんと荒れとったが、何とか走れるようにしてやった。行きはいいが、帰りは牽いてのぼらんといいかんていへんだったが始業に間に合うことが大事だったでな。とにかくここで暮らしたかったんだ。」

「村の衆は源吾鉄道ってゆうとるが、これはみんなの力でできたもんだ。オレは外へいってこいつは使えるぞって思ったものを持ってきたにすぎん。今では、よそから手伝いに来てくれる若い人たちも出てきて、分からんことはぎいてやってみる。一人でやっとならんとどうにもならん。」



「下村の駅は、義理の兄の家の裏に作らせてもらったんだ。なんせ下も谷が狭いで土地が足らんくてな。ホームを造る余裕もありやせんかった。機関車の整備をする車庫も必要だ。兄貴は大工をやっとならんと、車庫をこさえてもらったんだ。そのうち客も増えてきたんで小さいが駅舎をこさえて、事務もやれるようにしてもらった。この人だけが鉄道員のような格好してな。」

「線路や機関車を中古で手に入れて上栗小学校まで線路を敷き上げた。貨車はここに合うのがなかったんで、これも兄貴が小さいのをこさえた。荷はそうありやせんしコンテナくらいは運べるで、遠くに出すにも不自由せなんだ。」

「上栗鉄道は元々の人道を広げただけなので集落の畑の中や家々を縫うように線路が走っとる。一番上の小学校からさらに奥の山まで森林伐採用に延ばしてったんだ。」



蕎麦畑

上栗は昔つから蕎麦をたんと作つた。蕎麦にもいろいろな品種があるが、オレのは昔からここで作ってきたヤツだ。小粒だが甘みが強くてな。先輩からはお盆過ぎて蕎麦を蒔いて、三粒黒くなつたら刈り取れと教えられてきた。東京の蕎麦屋が上栗の蕎麦はうまいって買いに来るんだが、オレの蕎麦は東京の日の出商店街つとところにある蕎麦屋にずっと出しとるんだ。そのうちそこは屋号も「源吾」つて名前にしちまつたんだ。下村の駅にも看板を出してもらつてな。東京へ帰る人が訪ねていつとるそうだ。上栗の野菜もちつたしかないが日の出商店街の風さんで使つてもらつとる。

そーいやあ、ヨースト君の父親が、その路面電車が赤字なもんだで経営をしままいかと話をもちかけたそうだな。こりゃ奇遇なつこつたと思うとつた。したら、そこもひね狐が祀つたつて、それで持ち直したつていうじゃないか。こりゃやっぱしひね狐様の御利益だったんだな。

もつともオレン家ではおばあが蕎麦を打つのがうまくてな。おばあは死んでもう七年になるが、墓も家の横に作つたで、この村の人だ。死んでも朝から晩まで働かされてかなわんつていうとるかもしれんがな。

ヨースト君はおばあに打ち方を教えてもらつて、今ではやってきては白で挽いて打つて作つてくれとる。こないだは天ぶら屋の娘さんみっしよにやつて来て、天ぶらを揚げてくれたんだ。あつあつのはそりゃあうまい。エビも魚もブリブリで海で食つたよりうんとうまかつた。山菜も摘んできて天ぶら蕎麦にしても食べたが、おばあにも食べさせてやりたかつたな。



シナの木と蜜蜂

おばあをオレは八年看病しておつた。今やつたことをだんだん忘れていくようになってな。足は丈夫だったもんだで一人で出歩くようになって探すのにも一苦労したな。そのうち、いつも行くところが決まるようになった。それが、家の上にあるシナの木だ。あの木はオレが山を伐つて屋敷をこさえるときに、ちょうど蜜蜂が分蜂してついでにおつた。豊橋にいた時分にや渥美で採れるレンゲ蜜を味わつたことがあるが、それよかシナの蜜は匂いがすーつとしてうまいんだが、こらじやどうしても他の花と混ざつてしまう。この木のそばで蜜蜂を育てて採つてやればうまいミツが採れるぞと思つて、伐らずに残したんだ。キド一を敷いた時にも残しといたんだ。

おばあは昔の事はよう覚えとつてな。頭はだんだんと若返つていつたんだ。足腰は弱つてきたが、また外へ出て行つてな。ははーん今日もシナの木だ。なつて行つてみたら、案の定そこにおつた。木の上を見て「蜜蜂が来とるぞ。はよ箱もつて来まい。家へ行かまい。」つていうんだ。ちょうど今の時期で分蜂なんかありやせん。ははーん、おばあは最初にオレとこの木に来た時にいるんだなあって思った。最初にこの家で飼つた蜜蜂はおばあが見つけたもんだつたんだ。そんで、オレも勢いで「オレはここに家を構えて蜂蜜を飼うで、いつしよに住んでくれんか」つて、言つてみりやこれはプロポーズだったな。おんなじことをもういつべん言つてやつた。そうしたらおばあは「はいっ」つてにっこり笑つてな。そんでいつしよに家へ戻つたんだ。

そうして3日過ぎてにっこり笑つて逝つたんだ。おばあを看るようになってからは、蜂蜜で料理をこさえたり、「新蜜絞つたぞ」つてジュースを飲ませちゃあおつた。新婚生活をまっぺんできたんだつて思つたんだ。



ひね狐ふたたび

上粟も人が減ってまったで、どうしたもんかと思つたんだ。若いもんが町へ通えるようになったで、働きにも出やすくなくなったんだが、日本全体が変わつてまったでどうにもならん。鉄道のおかげで、道路を作らんでもすんだが、かえって不便になってまったんだ。動かしてきた人んたあも歳とつてきて、もうやめよかと思つたところへ、こんどはオレの枕元に狐が出てきよったんだ。これがやつぱりひねた狐だったんだ。「こら待て！」と。待てとはたいがいイヌにいうもんだが、人間様が狐に言われるとは思わなんだ。

そうしたら、ドイツから若い男が訪ねて来たんだ。ヨースト君というんだが、なんでもチロルで石碑を見て、来たくなつたんだそう。市山先生の話は本当だったんだな。

イモ田楽をこしらえてやつたら、うまいまいとたんと食べたんだ。ドイツもジャガイモの国だそうだな。おつかあがこしらえてくれるフライドポテトが一番うまいと思つたそうだが、このイモの方がうまいとおつかあさんに食わしてやるんだといつて毎年通つて来るようになったんだ。そのうち留学して市山先生の学生になつてな。そこで、ここは農業を使わんですむ農業やつとることでもいいとこだが、車のない村は世界の最先端だつていうんだ。あちらさんは自転車の町もあるつていうもんだで、オレも若い自分はこの山を自転車で上粟と下村を上り下りしとつたつていつたら、よけえに喜んだんだ。

ある時自転車を運んでやつてきて、尾根道を下るのはやらせようつて、自転車を持ってきたんだ。尾根道は長いこと人が通つたらなでなかなか下村においてこんであと半時待つて来なんだら、捜索隊を出そうかといつとつたところ、下村の義理の兄の家に着いたんだ。

まあオレの若い頃みたいだったな。あとで迎えにいってやつたよ。



Narrative

ひね狐のお告げから始まった

聞き書

オレが小学校を出るころに、この鉄道の工事が始まったつたんだ。まんだ戦争前のことだ。営林署が官林を伐つて運ぶため、下の本川筋から南アルプスの方に向かって森林軌道が敷かれたんだ。村の衆はキドーといつておつたな。でも、ここからは谷の下までは険しくて降りられせん。なもんで、村の衆たあは、歩いて尾根道を下つて下村へ出とつたんだ。もつとも食うもんは、みんな家で穫れよつたし、仕事といつても山仕事か畑仕事なもんで、別に外に出ることもそうなかつたんだ。それでもここいらのイモやコンニャクやお茶は、下村よりうまいで、町へ出しやあ金になるとはいわれとつたが、そんな金も技術もないしどうにもしようがなかつた。

ある朝、村の男衆が騒いでな。「キドーを敷け。コーン」と狐のお告げがあつたそう。その晩はみんな同じ夢をみたそうなんだ。その顔がひねてたちゆうんで「ひね狐様のお告げがあつた」つて騒ぎになつたんだ。ここらは昔から狐憑きも信じてつたで、祟られるとかなわんつて、村中総出で工事を始めたんだ。村の一番上にある神社にそのひね狐が祀られておる。村人の本気をひね狐様にみせんならんと、下の川からここの土地の特徴の赤石と青石を運び上げて奉納したそう。営林署の連中には、上粟の急坂をのぼれる車両があるもんかつてずいぶんとバカにされたそうだが、とにかく必死こいて工事したんだ。狐はがこん怖いもんだつた。



ひね狐のご縁

それからすぐにヨースト君から手紙と写真が送られてきたんだ。こんな車両を走らせたらどうかつて。なんでも、ドイツの港町で路面電車を経営している家の息子だつたそう。そのおじいさんが昔日本で世話になつたそうなんだ。今度は孫が恩返しする番だといわれたそう。

小型の路面電車は、昔豊橋で乗つていたのは違つて、乗りやすくそう。こりや年寄りにもいいぞつて、走らせることになつたんだ。上つて来る時にヤ力いるが、帰りは重力でそのまま下つてくで、電車が積んだる発電機を回して充電できるようになつとるんだ。上つた分が力になるのは理にかなつとる。ハイブリッドというが、ここは南斜面なもんだでまんず日照時間が長いし天気もいいときとる。これなら太陽光発電も出来るし、本川筋では谷川水力発電もできるかもしれん。エネルギーも全部村でまかなえりやこんなえーこたあないな。

水道を引いた時や麦の新品種を村に配つた時とおんなじように、村の衆は源吾鉄道つてゆうとるが、これはみんなの力でできたもんだ。オレは外へいってこいつは使えるぞつて思つたものを村に持つてきたにすぎん。

今では、よそから手伝いに来てくれる若い人たちも出てきて、分かんことはきいてやつてみる。一人でやつとつてはどうにもならん。



水道を引いた

当時は、村の衆はなかなか外へ出れなでな。町へ出るどころか、村で水を汲みにいくにも苦勞しとつたんだ。なんせ井戸は一箇所きしだつた。平畑の民宿ひなたは井戸端という屋号をつけとるが、井戸を昔から世話してきてな。桶二つを天秤棒にかけて運ぶのは子どもの仕事だつた。そんなもんで学校でよく勉強もしやせん。戦争で満州の平原を見ながら過ごしたのを思い出して、勉強せんことにはこれからの世の中やつていけんと思つて、山の上の沢から水を取つて水道を引こうと思つたんだ。

ちようどおばあとお結婚した頃で、ありや本村の隣からここへ嫁いできたんだ。ようこんなところへ来てくれたと思うが、そりや最初はびっくりしとつた。それで小学校で給食を作る仕事をしだしたんだ。あの頃は子ども数も多かつたでな。メシ作るのに水が要るとなつても水がねえ。村のもんは、水道といつても見たことないで、最初は話にのつてこなんだが、とにかく上から順番に学校とオレん家まで引いてな。蛇口をひねると水がいつでも出るもんだで、そりやあ子どもんたあは喜んだ。水道がいいつて家でもいうもんで、そのうち村のもんが見に来てこれなら家にもほしいつて言い出した。はじめは竹を切つて管にしてつないでいつたんだが、これじゃ何年かしたらまた換えんならん。ある時、飯田までいつたら塩ビ管が売り出されていったんだ。こいつはいつまで使えろと思つて、一軒ずつ金を集めて、町から若い衆が運んで、つなぎつなぎ埋めて引いていつたんだ。まんず、子ども達が重労働から解放されたんだが、それで勉強するようになつたんだ。よけいに遊ぶようになっただけかも知れん。

村の衆はオレが計画したもんで、「源吾水道」つて呼ぶようになつた。今でもその水が家まできちやおるが、後で村が引いた簡易水道よりうんとうまいんだ。そりや一番上の山の神様の脇からしみ出してくるところから引いた水だ。これで家で穫れたお茶を飲むと最高だ。お茶は百m標高が上がるごとに甘くなるつていわれて、ここは日本一高いところで栽培しとるお茶だから一番うまいつて言われてるんだ。

水道が開通したときには、その水でどぶろくを作つて祝いの会をやつたんだが、村の衆がキドーの話思い出してな。「引くこたあいいが金はどうするんだつて」んで、水道料金を毎月集めて積み立てて建設費を作ろまいかとなつたんだ。塩ビ管を使つたおかげでちつとも悪くなりやせん、修理費がかからんと金も早う集まつてな。

線路を敷く

オレは食糧事務所へ勤めとつたが、その時分はとにかく食糧増産ばつかしいわれとつた。下の衆たちは米やら野菜やらたくさん穫れて町へ売れるもんばつかり作つておつたが、こらじゃそんなもんは作れやせん。田んぼはできやせんし、土地もよけありやせん。上粟で穫れた野菜を食糧事務所に持つていくと、おまえんとこ野菜はうめえから、まっつと売つてくれんかと言つてくるんだ。こりや量より質で勝負の時代がやつて来る、上粟の土地ならうまいもんでできて売れるとふんだんだ。上粟は焼き畑をやつておつたで山を焼いて畑を広げりやええ。次男坊以下はみんな外へ出くしかなかったが、そいつらが畑やれば人手にもなる。村も賑わうんじゃないかな。そんでオレも住んどれる。稼ぐためにはようけ作つてもつと大きい町へもださなきゃならん。そのためには、キドーでなくて、国鉄の線路と同じほうが貨物車を国鉄線でどこまでも運んでいけるんで都合がいいと思つたわけだ。山向こうは大井川だが、その奥には森林軌道みたいに小さいが国鉄と同じ規格で線路が敷かれとる路線が走つとる。猟師の衆んたあはシシを追つて山を越えてくもんだで見えてはそういつとつた。それと同じようにやつたらまいかと思つてな。その話を食糧事務所で話したら、農業倉庫の引込線がだんだん廃止になっていく頃で中古品を安く分けてもらえらつてこともわかつたんだ。そんで線路や機関車を手に入れて上粟小学校まで線路を敷き上げた。貨車はここに合うのがなかつたんで、小さいのをこさえてもらつたんだ。荷はそうないしコンテナくらいは運べるで、速くに出すにも不自由せなんだ。

下村の衆は、これからは鉄道よか道を広げてトラックの方がええと話にのつてくれなんだで、まずは下村から上粟まで引くことにしたんだ。昔の作りかけのキドー路盤に敷いてつたんで、幅が狭いがこればかりはしよがない。なんせ広げようにも平らがないとこでな。枕木はちようどこらの山から出た栗の木を挽いて作つたんだ。昔は栗の木がたんあつて、秋になつちやあ栗の実を拾つて、かち栗にしといて煮ては食らつたもんだ。ところがクリタマバチが大発生して山の栗の木がみな枯れてしまつたんだ。それで、伐り倒していいようなのを選んで枕木にしたんだ。栗の木は硬くて水に強いので枕木にもつてこいなんだ。村の中のところどころに残つとるが、上に生えとる木は、栗の実を蒔いといて育つたやつだ。栗を干したのを砕いてササゲと煮ると甘くてこおばしいんだ。

崖・トンネル・蜜蜂・子ども

下村から上がつてくる途中どうしても崖を割らんとこつち側へ出てこれなんだ。あそこが一番の難工事だつたみたいだ。こいらは中央構造線ちゆうのが走つておつて谷が険しいんだが、岩ももろい。青崩峠というのはまさにそういう名前だ。こも斜面が崩れやすいつてんで、トンネルを掘つたんだ。手掘りだもんで小さいもんしかできやせんかった。そんでもおかけで後で線路敷くのがずいぶんと楽だつた。あの崖は蜜蜂に都合が良いとみえて、巣をようけかけに来る。巣箱を仕掛けとくと新しいハチが入つてな。ハチの団地みたいなもんだ。そのまま置いとくと熊にやられるでかなわんちゆうて家に据えて飼う人もおる。

その崖を過ぎると村に出るんだが、そこからの坂が急だで、ずいぶんと難儀しとつた。中古の機関車は力がありやせん、運転手も機関車を必死こいて登らせとつた。小学校へ通う子どもんたらあは客車からみんな声援を送つてな。運転手は村の花形の仕事だつたんだ。運転手も喜んじやあおつた。学校が終わると、当番で客車を掃除しとつたが、機関車もピカピカになるまで磨いてきれいにしとつた。機関車のおかげで山道を登つてこんと学校へ通えるつてもんだ。みんな感謝の気持ちをやうもつとつた。客車といつても、貨物車にイスを並べて屋根を付けただけの開けっ放しにカバールされるようにしたるだけだ。開けっ放しの客車は冬はさぶてかなわんが、夏は風に吹かれて気持ちいい。トンネルでは上から冷たい滴も落ちてくるが、観光で来る人んたらあがえつて面白がつて人気になつたんだ。そんで今でも走らせとるんだ。

ナギと気象

昭和三六年の豪雨のときは、あちこちで土砂崩れが起こつたんだ。それで、村の東外れにも大きなナギができたんだ。線路はぎりぎり助かつた。あの雨で川の流れが変わつて埋没林も出てきたんだ。下の谷まで見えてとこで、夕立の後には大きな虹がかかるんだ。去年は二重の虹がかかつて、ここに九十年住んでこんなきれいな虹は初めてだ。今年の年賀状にしてみたんだ。

オレは建設省に頼まれて、五十年気象観測をやつてきた。百葉箱を据えて毎日記録をつけて報告しとつた。その研修で立山に連れて行つてもらつたとき、砂防ダムの工事も見に行つたんだ。そこでトロッコに乗せてもらつたんだが、この小さい客車がずいぶんと調子いい。余つとつた車両をみつめて、いっちょ自家用の車両を作つてやるまいかと思つてこしらえてみたんだ。こいつが今も調子いい。村の年寄り衆がちよつと出かけたないなつていうときにや、こいつを出してやればすぐに行くことができる。郵便配達も頼まれて、その時は専用車にしとつた。

こいつの出来たての頃に、フランスの若い女の人を上粟まで乗せてやつたことがあるんだ。その人が四十年ぶりに訪ねてきてな。「こんな小さな車両でしよう崖から転げ落ちるおちるんじゃないかしらとびくびくしていたわよ」つていわれてな。その頃はオレも若かつたんで、かっつこつて飛ばしたかもしれんな。

市山先生

そのうち、上粟へ市山先生が通つて来るようになったんだ。当時はまだ地理の学生さんのようだつたな。キドーに乗らんと、わざわざ昔の尾根道を辿つて上粟へ来たんだ。そうするとオレン家が最初にあるんで、訪ねてきたというわけだ。村の暮らしを知りたいちゆうて、もう誰も使わんような道をかき分けて上つてきたそうだ。そこで、まんざいモでも食えやつて田菜をこしらえてだしてやつたところが、こんなうまいイモは食つたことないつてそれから上粟の作物をこれは珍しいもんだつて、本や雑誌記事で紹介してくれたんだ。昔からここで穫れたもんばつかり作つてきたからな。

標高の高いところで日当たりもいいし、温度差も大きいし、土もいいし一番に決まつとると市山先生がいつたもんだ。涼しいで虫もそうおらんし、殺虫剤も要らんし、草むしりもそうやらんでいい。堆肥は家で作つたのを下の畑に流せばいいんだ。自分ではよそのを食べ比べたことないでようわからんが、お客さんもみんなうまいつていうんだ。

今は年寄り一人きりになつてしまつたで、野菜も食べる分しか作らせんが、ラオスから女の先生が来たときには、キャベツやハクサイをみて、こんな大きいのは見たことない。かぶりつきたいつていな。日当たりもいいし、土も肥えとるで、よくしとなるんだ。

平成二五年元旦

謹賀新年

遠山上栗

源吾九一才



市山先生は、スイスへ行ってチロルで「チロルをスイスの上栗と命名する」つて碑をこしらえてきたつて報告に来てな。そんなもん作つたところで、上粟なんて向こうの人にわからんわなと笑つておつた。そんでも、こつちにも碑を作ろまいかつて「上粟を日本のチロルと命名する」つて銘を市山先生に書いてもらつて、小学校に碑を建てたんだ。



山に暮らす

当時は、山の木もよう売れたので、伐採用に奥の山まで延ばしたんだ。今もいい木があれば運んじゃおる。兄貴のとは製材もやつとるんだ。そこらでは家の桶の材にするサワラを伐ってきてな。桶に使ったんだ。昔は何をするにも桶がいったんだ。材料は家で用意して、寸法をあわせてこしらえてくれたんだ。桶にする竹は家で用意しちやおった。竹はいろんな道具にも使うし、ここらの家にやあどこも竹林をもっとおるんだ。

桶は下村から職人がやってきて家々を回っては作つとった。この桶もオレが20年前に作つてもらったもんだ。桶屋は屋は弁当を持つてくるが、晩は一杯よばれていつてな。桶屋が帰る時には遅なつても送つてやつとった。桶屋も帰りを心配せんでも飲めるつちゆううんでまたよう飲んどつた。もつともその頃は家のドブロクしかなかったがな。ドブロクも桶がなけなでやせんかった。

今でも豆腐や味噌を作るには桶でなきゃならん。熱いもんは桶でなければ受けられんし、プラスチックで作つたん

では空気が入れ換わらんでまずうて食えたもんじゃない。昔は近所の衆が集まって、豆腐を何十丁と作つたんだ。女の衆んたあは豆腐を取つた後の湯で髪を洗うのが楽しみだったでな。

今は婦人会で元気にやつておる。下村駅の花壇や上栗のぐるりの花壇を世話しちやおつてな。ロッジの食堂で料理も出しとる。今年はタツタンソバを植えて、赤い花がよう咲いておるな。珍しいちゆうて好評だが、村のソバと交配せんといいがな。



牛とシシ

ここいらでは、牛の肥育も盛んでな。昔はばくろうが尾根道を引つ張つてやつてきたもんだ。キドーができて楽になつて、草刈り山もあるし、雑穀や麦わらもいくらでもとれる。糞は堆肥になるし、いい牛に育つてんで、ようけ頼まれて村の衆たちが飼うようになったんだ。古い家を牛小屋にしたな。オレンとは羊を飼つとつた。飼うに楽なんだ。おばあが毛を刈つて、子どもたちにセーターや襟巻きを編んでやつた。そのうちヤギを飼うよになつて、今じゃニワトリだけに、小屋も小さくなつたがな。

上栗は猟師が住み着いてできた村だつて言い伝えもあるくらいだ。猟は盛んでな。山で猪や鹿や熊が山で獲れたぞつて時にやあ、ほい来たと機関車を出して、貨車に積んで山まで行つて下村まで運んでつたんだ。山肉も精が付くと人気でな。下村の星野屋さんは下村駅のそばに店を建てて、店の裏に下ろしてもらつてすぐりにりよられるようにしたんだ。山で撃つたらそばまで取りにいけるもんだ。肉もいい状態で手にはいるんだ。今は害獣駆除で夏でも獲るようになった。そんで、ロッジから先のキドーも活躍しとる。シカやシシに荒らされてはかなわんで、上の畑には網をはつておいた。



